
勇者になれなかった男

ラーカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者になれなかつた男

【Nコード】

N8669Y

【作者名】

ラーカー

【あらすじ】

勇者を召喚する魔法で連れ去られる途中で捨てられた男は異世界でなにをするのか？
ちなみに作者は文才がありません。

prologue

僕はいつものように、学校からの帰り道に商店街を歩いていた。

賑やかな店先を眺めながら歩いていると、中学生とすれ違い

引き寄せられた。

驚いて引き寄せられている方向を見ると、穴が開いていて、そこから見えない手みたいなのが僕と中学生を鷲掴みにして引き吊り込んだ。

重力を感じない穴の中を引っ張られていると、見えない手がいきなり僕だけを投げた。

重力の感じない得体の知れない穴の中でだ。

(あれ？これって最悪なんじゃ……)

どうすることも出来ずに、等速直線運動をしながら得体の知れない穴の中の壁にぶつかった。

prologue (後書き)

ノリで書きちゃった……。

後悔はしていません！

キャラ設定（一章までの時点）

ヤガミ トオル
夜神 透

男 17歳 高校二年生

身長は170cmくらいで、顔立ちは整っているほうだが、ボサボサの髪に、寝不足なのか目のしたに隈が出来ているためすべて台無しになっている（きちんと身なり等を整えると高確率で女性のハートを打ち抜く）。

基本的に連れ去られた時の制服姿で行動している。

身体能力は高く、壁を駆け上がることもできるほど。気配を消すのも上手い。

いきなり連れ去られたわりに、途中で捨てられた可哀な男。勇者の召喚でのミスだとわかると「勇者になれなかった男」と名乗るようになる。

キャラ設定（一章までの時点）（後書き）

設定を追加するときには随時更新していきます。

episode 1

チュンチュン

「うーん」

鳥の鳴き声と暖かい日差しを感じて、目が覚めた。

「夢か？」

とりあえず、身を起こそうと地面に手を つけなかった。

「へっ？」

我ながら間抜けな声をだして、落ちた。

「痛たたた」

どうやら木の上に居たらしく、地面が柔らかい土だったため、怪我をせずに済んだ。

もっとも痛いことには変わらないが。

身を起こして、制服についた土を払い、そしてこっちを見ていた女の子と目があった。

「……」

「……誰？」

「ノーラ」

「ノーラちゃんね」

「あなたは？」

「ヤガミ トオル夜神透。透が名前な」

「そう」

「……」

なんなんだろうこの子は？

年はたぶん10歳くらいで、見た目は西洋の女の子で服装は巫女服をチャラくしたような服。

そこまではいい。

だが、身長のはある杖に装身具として宝石をいくつも身に付けている。

「ちょっと質問していいかなノーラちゃん？」

「ノーラ」

「？」

「ちゃんはいらない」

「ノーラ？」

「それでいい」

変わった子だな。何を考えているのかまったくわからない。

「質問は？」

「ノーラって、お嬢様なの？」

「違う」

「じゃあ、泥棒？」

「違う。魔術師」

「魔術師？」

「そう」

何を言っているのだろうかこの子は。

古臭い魔術なんてオカルトは遠い昔に、科学技術の発展により駆逐されたはずだ。

なのにこの子は自分が魔術師であることを微塵も疑問に思っていない。

子供の思い込みとは、また違う。

なんらかの根拠があるからこそ、その言葉には自信が溢れている。

「トオル」

「なに？」

「答えて」

ノーラは僕に杖を向ける。

「なにを？あと人に杖を向けたらいけないって、両親に言われなかったの？」

「親はいない」

「そりゃごめん」

「あなた」

一呼吸おいて、はっきりと告げる。

「あなたどうやって私の結界の中に入ったの？」

「結界？」

疑問に思っ て辺りを見回すと、地面にオカルトとしか思えない、魔法陣が地面のあちらこちらに、規則性が無いようで、規則的に描かれている。

「僕が木の上で寝てるのに気づかないで結界を張ったんじゃないの？」

「とりあえずごまかしておこう。」

「それはない」

「……はつきり言うね。理由は？」

「これは三年前に私以外が入れないように張った」

「……僕が三年前からずっと木の上にいるわけないか」

「そう」

「睨まないでよノーラ」

「完全に怪しい者を見る目だな。」

「答えて」

「なんで結界の中にいたかを？」

「話して」

「……警戒心MAXだな。」

「いや、僕もわからない。ていうかここ何処？」

「風景的にはギリシャの遺跡みただけど、どうなんだろ。」

「……」

ノーラは小首を傾げて、考え込んでいる。

杖は降ろさないが。

「《風よ刃となりて切り裂け》」

「はい!？」

ノーラが怪しげな呪文?を唱えたら、杖の先端から風の刃が襲いかかってきた。

「危ないな」

「!？」

余裕で避けると、ノーラの表情が驚愕で固まる。

どうしたのだろうか？

至近距離から放たれた岩をも簡単に切り裂く風の刃を避けたのが、そんなに驚くことなのだろうか？

「あなた」

「……」

「なにもの?」

何者って言われても……

episode 1 (後書き)

グダグダ

episode 2

とりあえず、自分の身に遭ったことを話してみる（プロローグ参照）。

自称、魔術師なんだ。原因がわかったら御の字だ。

ノーラはその話を聞くと、目を少しだけ見開いた。

どうやら、驚いているらしい。

「それはたぶん知ってる」

「どれ？」

「あなたが来た方法」

「ふーん。わかったの？」

「その前に一つ」

「質問かい？」

「（コクリ）」

だんだんこの子の扱い方がわかってきたな。

「あなた私のこと本当に知らない？」

「んー？名前はノーラ。職業魔術師。かわいい女の子。それくらいかな」

「……かわいい」

ノーラが小声で何か言ったが、小さすぎて聞こえなかった。

「ノーラどうしたの？」

「なんでもない」

「ふーん？」

なにかあるような顔をしているけど？

「それで僕が来た方法ってなに？」

「それは」

少しの間ノーラは虚空に視線をさまよわせて、意を決したように言う。

「たぶん王家に伝わる勇者召喚の魔法」

……

「………本当？」

「（コクリ）」

「トオル」

「ん？」

再度杖を僕に向けながら聞く。

「私のことを知らないのになんでわかったの？」
「ん？ノーラって有名人なの？」

「（コクリ）」

「ノーラって有名人なのか……」

これからに影響しなかったらいいけど。

「答えて」

「なんで王家に関わっているかわかったわけ？」
「（コクリ）」

警戒心が強いな。

「いろいろ理由はあるけど、大ざっぱに3つ
指を三本立てる。」

「まず一つはその格好」

「格好？」

「ああ。最初に聞いた時にそんなにジャラジャラ宝石を身につけているのにお嬢様でもないって答えたからな。根拠としては弱いがつ目」

指を一本引っ込める。

「次は一つ目にもつながるが、自分の事を魔術師って言った。見たことはないが宝石に魔力が溜まり易いって聞いた（本からの受け売り）が、一、魔術師がそんなに高い宝石を持てるわけがない」

仮に持てたとしても、丁寧に装身具として加工するほどの金はこの子からは感じられない。

ざっと宝石を見ても、純度が高く。下手すれば国宝級の価値がある。

「わかるの？」

「素人でもわかるレベルだ。一個人が持てないなら、後ろにでつかい組織または国が絡んでいるな」

また指を引っ込める。

「最後にノーラは『王家に伝わる勇者召喚』って言った」

「あ」

「勇者召喚は口振りから、極秘っぽいからそういつのを知っているならなんらかの形で王家に繋がりがあある」

最後の指を引っ込める。

「正確」

ノーラは杖を下ろしてから言う。

「で、詳細は？」

「私は宮廷魔術師」

宮廷魔術師ていうのは王家に仕える魔術師のことかな？

「私はその長」

「ノーラが？」

いや、それなりに高い地位にいたと思ったが、長とは、意外だった。

「いま疑った？」

「いや、驚いた」

後はこの世界の事でも聞こうとしたら、

『ノーラ様ーーーーッ!』

なんか大声が響き渡った。

episode 2 (後書き)

キャラがわかりにくいな。

episode 3

結界の境と思われる壁をドンドンと叩きながらなにかよくわからないことを叫んでいる。

「なあ、ノーラ」

「なに？」

「あれ無視していいのか？」

「いい」

「いや、なんかノーラに用事でもあるんじゃないのか？」

「ある」

「ていうか、宮廷魔術師？の長がこんなところにいるの？」

「休暇中」

「ならいいか」

僕はもう面倒になったので草村に寝っ転がると、ノーラも横に座った。

「ノーラ様ーッ！戻って頂かないと私が怒られるんですよー！」

「……………ひるねい」

「《音よこちらはこちらにあちらはあちらに》」
呪文？をノーラが唱えると、途端に叫び声が聞こえなくなった。

「それ魔法？」

「魔術」

違いがわからない。

「ふーん。それ便利そうだね」

「魔術は便利」

でも、と続けて

「使えるのはほんの一握り」

「才能ってやつ？」

「それもある」

他にもあるのか。

「あとは血の滲むような努力」

「才能だけじゃ魔術は使えないってこと？」

「そう」

うわー。面倒そうだな。
必要無さそうだから、習わないけどね。

「ところでさあ」

「なに？」

「なんかあの子泣いてるんだけど」

「……」

ノーラがバツの悪そうな顔をして、杖を振る。

「ノーラ様、を、連れ、て、帰、らな、かつたら、怒ら、れちゃ、
う……」

「……」

声が聞こえてきた。

マジ泣きしてるじゃないか……。

「……（クイクイ）」

ノーラが服の袖を引っ張る。

「一緒に来いと？」

「（コクリ）」

「まあ、いいだろ」

ノーラと共に泣き虫のところへ行く。

「グス、グスン」

「リス」

「ふえ？はうつ！ノーラ様ーッ！」

「うるさい」

飛びかかろうとして、杖で叩かれた。

「ノーラ様だ。あ、至急王宮に　　って何者！？」

気付くの遅いな。

「僕は夜神透。トオルが名前ね。僕は『勇者になれなかつた男』だよ」

「トオル。それはない」

ええー、カツコイいじゃん。

episodes (後書き)

最後のがやりたかっただけ。

episode 4

リズは馬車でやって来たらしく、王宮まで馬車で行くことになった。

ちなみにあの後、リズ（ノーラの補佐的な立ち位置らしい）がなんか僕に散々とよくわからない事を言っつて、ノーラを僕から引き離そうとしたが、ノーラの「トオルの事は王様に会ってから話す」の言葉で、一応黙った。

ノーラの話だと、どうやら、さっきの場所は王宮から割と離れた場所にあるらしい。

「えっと、銅貨五十枚で半銀貨になって、半銀貨十枚で銀貨一枚になるんだっけ？」

「（コクリ）」

今はこの世界の常識について学んでいた。

今向かっている国はサモナ王国といい、交易と魔法で発達した国らしい。

ノーラは説明はうまくないが、リズが適切なフォローを入れてくれるから、大まかには理解できる。

「それで銀貨二十枚で金貨一枚」

「金貨は十枚で白金貨になります」

「なるほど……。なんでリズは睨みつけくるんだ？」

「なんでこんな常識知らずをノーラ様が……」

小声のつもりかもしれないが、はっきり聞こえているからな。

「トオル」

「なにノーラ？」

「無礼者！ノーラ様を呼び捨てになど」

「うるさい」

「ノーラ様！？なぜ杖で叩くのですか！？」

漫才見てる気分だな。

「サモナにそろそろ入る」

「わかった」

馬を操っていた人が門番となにか話している。

入国許可とかそこら辺だろう。

大きな門をくぐり抜けた。

「よつこそサモナ王国へ」

賑やかな声が聞こえると同時に、ノーラが歓迎の挨拶をしてくれた。

episode 5

騒々しい城下町を抜けると（観光しに行こうとしたらノーラに止められた）、やたら大きな家が建ち並ぶ、道に入った。

どうも、貴族とかが住む所らしい。

この国では身分の差で、

王宮

ここを中心に位置し、主に王族やそれに仕える人、例外として客人が住む。

高町

王宮の周りにある町。主に上級貴族や商人の一部がここに住んでいる。いわゆる高級住宅街みたいなもの。

内町

高町の周りにある町。下級貴族や裕福な人が住む

下町

内町の周りにある町。平民が住み、商売が盛んな所（ここには市場がなく、至る所で商売がされているらしい）

無法地帯

下町の北側にある場所。犯罪者など、なんらかの理由で下町にすら住めない人達がいる場所。

「これって、どの国でも一緒なの？」

「違う」

「この国は良くも悪くも商売で成り立っていますから。他の国では、無法地帯はあってもこの国ほど大きくありませんし、身分の差による区別は、ここより露骨な国が多いです」

なんかノーラが単語を言っつて、リズが補足するっつていうのに慣れてきたな。

「例えば？」

「立ち入り制限」

「そうですね……。この国では、身分が低くても高町くらいなら普通に入れますが、他の国では、下の身分の人が上の身分の住むエリアには入れないようになってますね」

「無法地帯があるらしいけど、その人が高町なんかに来たら危なくない？」

「それはない」

「？」

「高町と内町の一部では、そこに住んでいない人が入ったら魔術により報告・監視されますので」

また魔術か、便利だよな。魔術っつて。

「危なそうな人が入ったら、騎士投入？」

「そう」

「正確には自衛騎士ですがね」

要は警察みたいなものらしい。

「だいたい理解できたぞ」

「良かった」

「なんでこんな奴がノーラ様に……」

この後は、なんか王族と会わなきゃいけないらしい。

ノーラが僕がこの世界に来たこととかで、伝えないといろいろマズらしい。

……偉い人と会うのって、いろいろ嫌なんだかなあ。

episode 6

「トオルよ」

「はあ」

「お主には、姫の近衛兵になってもらいたい」

……なぜこうなった？

30分前

「ノーラ」

「なに？」

「この格好で王族なんか会ってもいいの？」

自分の汚れた制服姿（木から落ちたり、地面に寝っ転がったりした

時のもの（）を見て、ノーラに質問する。

「いい」

「いいの？」

「（コクリ）」

いいらしい。

僕はあの後、王宮の人に詰め寄られたが、ノーラの王様に話すという事で（リズは部下の人に仕事が溜まっているとかでどこかに引張られて行った）あっさり中に入ることが出来た。

……ノーラってかなり偉い位置にいるのがあの門番の態度でわかった。

「……一応、汚れ拭うか」

近くにいたメイド（初めて見た）に濡れたタオルを持ってこさせて、汚れを拭う。

「……さっきよりはましか？」

「たぶん」

「ノーラ様」

「誰？」

「それはこちらの台詞だ。どこの馬の骨かもわからない者を城に入れるなど、考えられませんぞ」

「誰？」

「宰相のユバイル」

「ふんつ。ノーラ様はともかく、王様と面会するのだ下手な行動は命が無いと思え」

イラつく言葉をはいた後、ユバイルは先に部屋に入って行った。

少しすると、中からメイドが扉を開け、お辞儀した。

「ノーラ様と……」

「トオルだ」

「トオル様。どうぞお入り下さい」

「僕なんかに敬語は使わなくていいよ」

「仕事ですので」

このメイドは意志が堅いな。

下らない事を考えながらドラクエなんかで出てきそうな部屋に入ると、視線が突き刺さった。

だが、その視線はこの部屋にいる人数より多い。

「ホッホッホ。どうした緊張しなくても良いぞ？もつと近くに寄れ」
……この人が王様かな。なんか無駄に豪華な椅子に座っている。

「あなた、初めてこんな場所に来たのだから緊張してもおかしくな
いわ」

「……」

発言した方は王妃で、黙って僕を観察しているのが娘かな？

「……そんな所に突っ立つな」

「早く来たまえ」

騎士の男に言われて、普通に部屋の中央まであるく。

「一ついいですか？」

「なんじゃ？」

「なんで武器を持って隠れて見張っている人がいるんですか？」

「！？」

王様の動揺に、隠れていた一人がナイフを王様に突き立てようとしたので、蹴り飛ばした。

「隠れるの下手だね君」

「……なにものだ？」

「僕かい？僕は『勇者になれなかった男』だよ」

「どづいつことだ？」

「君には関係ないよ」

そこで相手の鳩尾につま先を叩き込み気絶させる。

「……な！？」

「……」

「……お主」

「何でしょう？」

「名前はなんて言っのじゃ？」

「トオルです」

王様はしばし悩む素振りを見せた後、口を開いた。

「トオルよ」

冒頭へ戻る。

episodes (後書)

なんだこれ？

episode 7

「お断りします」

王様の提案を吟味してから、却下する。

「ふむ。理由を聞こうか」

「まず一つ目は初対面の人間に頼む事じゃないからです。もし僕が暗殺者とかだったらどうするんですか？」

「それはないよ」

「?どういこと?」

「ノーラには真眼があり、邪悪な心を持つものに近寄りません」

真眼って何だろう? 聞く限りじゃ人の性根がわかるスキルみたいだな。

「……2つ目は姫さんの近衛兵ってことは、仕事の時は姫さんに四六時中近くにいなきゃいけないんでしょう? そんな面倒なのはイヤだね」

「貴様如きが姫さんなどと気安く呼ぶな」

なんか騎士さんに怒られた。

「んー? 僕は姫さんの名前すら知らないし? まあ、護衛ならあんた

でいいんじゃない？」

「私は騎士団長だ。姫の警護は出来ん」

「騎士団長？あー、確か敵と戦うタイプか。なら守るのは苦手なのか」

「……そうだ」

「あれ？確か騎士って、確か誰かを護るのが基本じゃなかったっけ？」

「……グッ」

「あれ？なんで言葉に詰まってるの？自覚してたの？」

「……貴様は私達をバカにしているのか？」

「？役立たずなんてバカにするわけないじゃん」
「貴様ツー！！」

なんでこいつは怒っているんだ？

役割が違うのだから、別に恥じること無いのに。

「……決闘だ」

「まあ、いいけど。時と場所は？」

「時間は10分後、場所は闘技場コロシアムでだ」

「いいよ。闘技場の場所知らんから案内してね？」

「いいだろう」

軽く決闘を受けたら、周りが騒ぎ始めた。

「こっちだ」

「はいな」

騎士の後について、闘技場へ向かう。

暇つぶしクワイにはなるだろう。

「……よろしいので？」

「なにがじゃ？」

「決闘をさせることです」

「マズいかもしれませんが、殺しはせんじやる」

「しかし……」

「大丈夫」

「ノーラ様？」

「トオルは勇者召喚で一時は選ばれた存在」

「勇者召喚は来週行われる筈では？」

「（コクリ）」

「一時とは？」

「途中でより勇者らしいの方が選ばれた」

「つまり、二人が召喚される際にあの者は選ばれたが、召喚中に選ばれなかったと？」

「（コクリ）」

「なら、時間が違う理由も説明がつかますね」

「面白そうじゃからわしらもいくかの」

「王様……」

「トオルは負けない」

「ふむ。なら賭けるかの？団長が勝つか、トオルが勝つか」

「トオルは勝つ」

「では、ワシは団長じゃの」

「……………王様、王宮で賭け事などしないでください」

episode 8

決闘場^{コロシアム}で僕と騎士団長？が向かい合っていた。

「武器はいらないのか？」

「生憎、僕は今も昔も徒手空拳なんで」

「ふん。そうか」

観客席の王様が立ち上がった。

「じゃ、ルールはなんでもありの一本勝負。勝敗は片方の戦闘不能か降参のみじゃ。よいかの？」

「わかりました」

「ハイハイ」

「では、始め！」

「サモナ王国騎士団長ユバイル〓サラカマル、参る！」

名乗らなきゃいけないっぽい。

「『勇者になれなかった男』夜神透。行くよ」

ポケットに手をつ突っ込んで、名乗る。

「舐めているのか？」

「舐めるわけないじゃん。これが構えだ」

「ならば、死ね！」

バスターソードを振り下ろすユバイルに、それを右に避け、居合い拳打を鎧の脇に叩き込む。

「ぬっ！？」

「やっぱりあんま効かないか」

鎧の上からなのか、居合い拳打はあまり効果はないようだ。

居合い拳打はなにかって？

簡単に説明すると、居合いの拳版みたいなもの。
刀の代わりに拳を使い、鞘の代わりにポケットを使う。

神速の拳は速すぎるがゆえに、殴られるのには実感が湧かず、いきなりダメージが襲ってくるような感覚に陥る。

「今なにをいた？」

「すぐにわかるよ」

「そうか！」

「危なっ！」

突然襲ってきたバスターソードをよけ、踵落としを決める。

「ふん！」

「効かないか……」

流石は騎士団長。僕の強さを理解して、その上でよけなかったな？

僕と騎士団長では、体格は約2倍も差がある。

単純な筋力だけでも、かなりの差があるだろう。

だが、居合い拳打の本当の恐ろしさをまだ理解してないようだ。

「そんな軽い身体じゃ、傷一つつけられんぞ？」

「勝手に決めるな」

そう言い合いながらも、攻防は続く。

「ユバイルだっけ？なるほど騎士団長になれるわけだ」

「なんだ小僧降参か？」

「そんなんじゃないさ。あんたは生粋のパワータイプだが、相手の戦い方で自分が勝てるように調整できるのか……」

「よくわかったな」

あからさまにバカにしたように、ユバイルが言う。苛つくな。

「まあね。そろそろ終わらせるか」

「お前の負けでな」

ユバイルの攻撃の速さがドンドン上がっていく。

「竜巻？」

「『スラッシュトルネード』！！」

ダサイネーミングだな。

「その技を出すのは遅すぎたな……」

刃の煌めく竜巻から離れながら呟く。

「夜神流『崩錠』」

「！？」

刃の煌めく竜巻はいきなり、勢いを失い。

「グハッ」

「僕の勝利だ」

ユバイルは倒れ、僕は立ったまま、どちらの勝利かは一目瞭然であ

つ
た。

episode 8 (後書き)

夜神流の技とか募集します。あとオリキャラも。

ちなみに夜神流は作品中ではああいつてますが、ああなるのはあの構えでの話です。

夜神流は夜神家に伝わる格闘技でいろいろな構えがある事になっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8669y/>

勇者になれなかった男

2011年12月6日00時59分発行